

交流文化

立教大学観光学部編集

2011.
volume

11

11
交流文化

特集
旅の記録



特集
旅の記録

立教大学観光学部

交流文化 11 ©2011
立教大学観光学部

ISBN 978-4-9902598-7-7

特集

02 旅の記録

04 地図がなければ 旅も調査も意味がない

ルートマップから五万分の一の地図まで
岩田修二

18 カメラで悩む

写真は「記録」か、それ以上のものか
安島博幸

24 インターネットで旅の記録を共有する

豹変するバンコクの相貌
稲垣勉

30 「交流文化」フィールドノート① 長野・志賀高原における 観光地としての新たな魅力づくり

庄司研究室

34 インタビュー 旅をノートに綴る

松村公明

38 読書案内 『日本奥地紀行』 『僕が見た「大日本帝国」』

40 最近の講演会から 高野秀行講演会「それでも私は旅に出かける」

43 在外研究通信07 重層化する文化景観

大橋健一



立教大学観光学部

観光学科／交流文化学科

立教大学観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科体制です。フィールドを世界に広げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。



立教大学観光学部
〒352-8558
埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

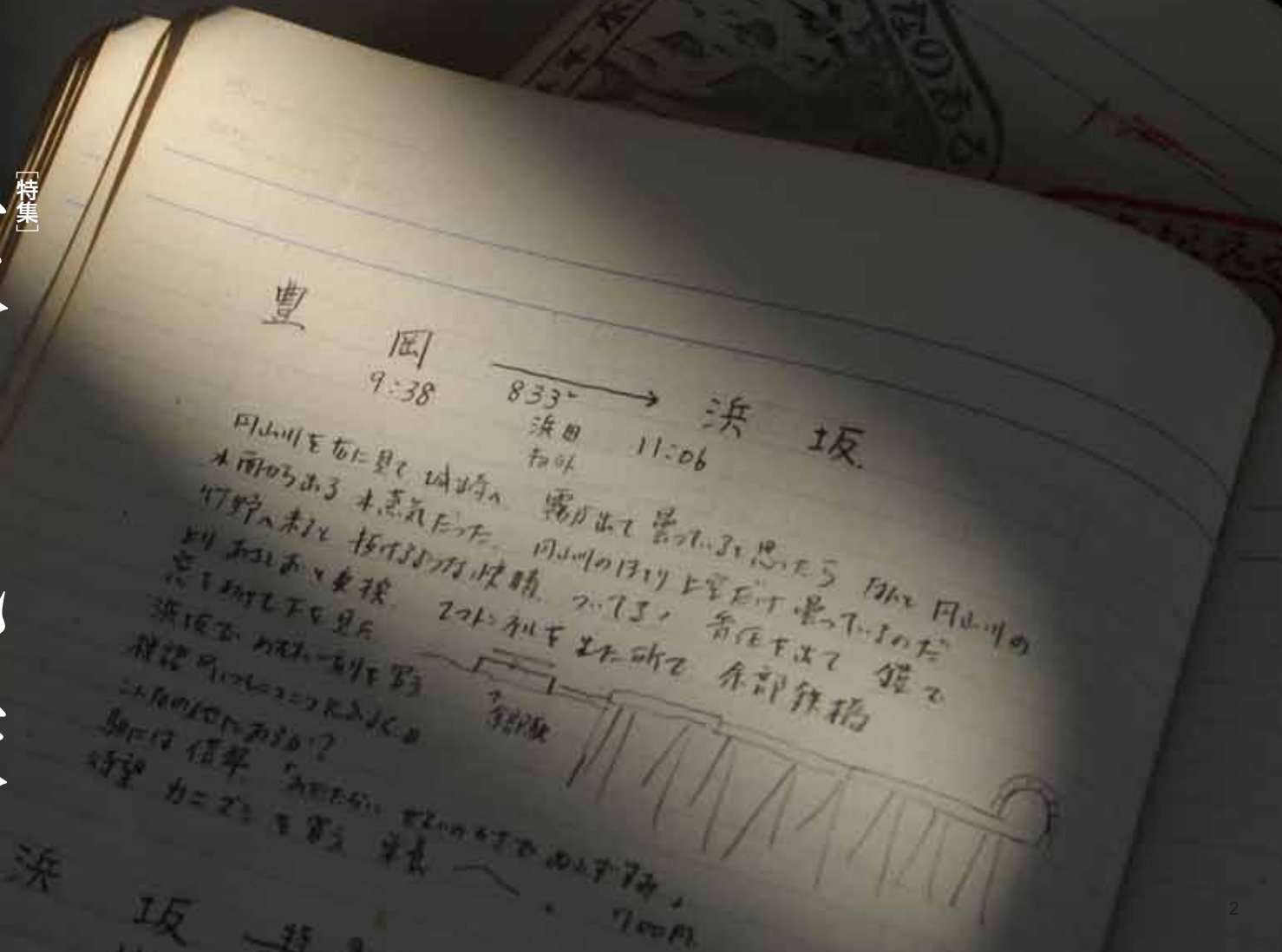
<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

紀

旅の記録

特集

旅にさまざまなかたちがあるように、その旅の記録のされ方もさまざまである。目に映るものと心象風景を重ね合わせた旅日記を残した先人達もいれば、消え去ろうとするものを記録にとどめようと旅に出た者もいる。また、旅心を絵手紙として届けることを楽しみとする旅行者も少なくない。今日、旅の記録は従来のペンと紙を越えて大きな広がりを見せている。本号では、地図、カメラ、電子メディア、日記によって記録される旅の一端を覗いてみよう。



【写真1】ブータン=ヒマラヤ,ルナナ南部の高原地帯.図1のルート上の地点101003から見た東側の湖と背後の水河.1998年10月10日撮影.

地図が なければ 旅も調査も 意味がない

ルートマップから

五万分の二地形図まで

文・写真・図 岩田修二

ヒマラヤの水河調査から南極の山岳地帯の測量まで、地図のない辺境地域を訪ね、ルートマップをつくりながら調査旅行に出かけた岩田修二教授(観光学部)の語る旅と地図にまつわる話。

場所の記録と地図

旅や観光に地図は必需品である。旅行ガイドブックにも地図は欠かせない。地理学にとっても、地図はもつとも重要なアイテムのひとつである。なぜなら、場所の位置を確認するには地図を使うしかないからである。地理学での場所の記録の方法は、その場所と一致する地図上の地点に印をつけ、その印のわきに地点番号（たとえば10082501など、この場合は二〇〇八年八月二五日の第一地点の意味を書き込む。この地点番号は野帳に書き込まれ記録のインデックスになる。つまり、地理学では、調査記録も行動記録もすべて地図頼りである。

ルートマップ

大学院生のとき、ヒマラヤの辺境地域（北西ネパールのトルボ地方）で氷河と地形の調査をすることになった。ある日、講座の教授に呼ばれた。

「君はヒマラヤで調査をするそうだが、地図はあるのかね」

「いいえ、インド測量局の地形図は国家機密で使えません」

「地形図が使えないなら、ろくな仕事はでき

ないね。行くのはやめなさい」

（「地図は自分でつくりますから」と答えたのをグツとこらえて、うつむいていた。「正確な地形図のない地形調査などあり得ない」という答えが返ってくるのがわかっていたからである。

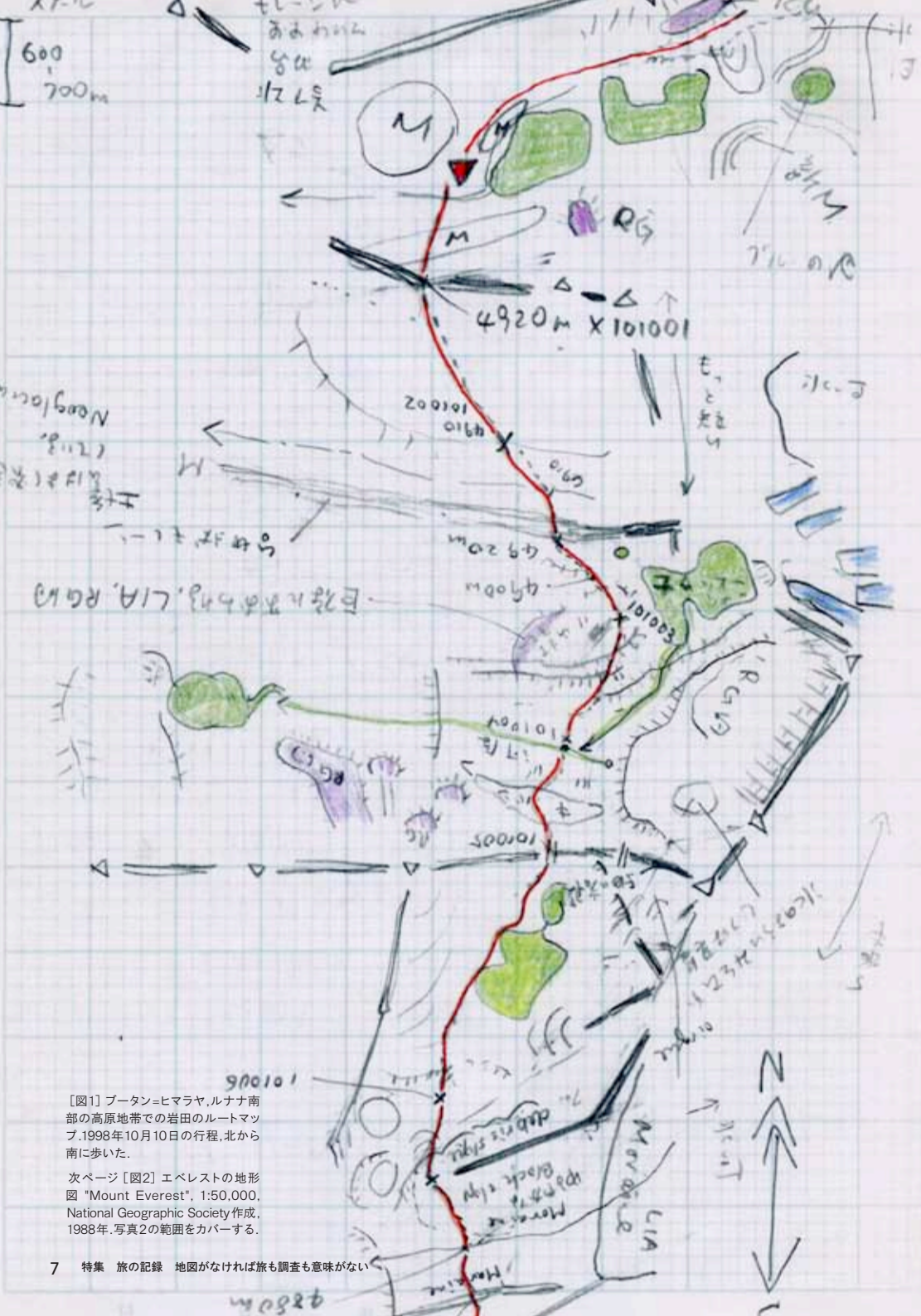
地図のない地域（地図の空白部）を旅行した一九世紀の探検家たちは、みんなコース沿いの地図をつくりながら進んだ。旅行しながらルート沿いに地図をつくることをルートマッピングという。中央アジアの探検家たちの中でもスウェンヘーデンのルートマップはすばらしい仕上がりであった。そのような探検家たちのルートマップを学び、調査の度にルートマッピングを試み、地形測量も習得したので、大学院の後半には、何とかルートマップがつけられるようになっていた。ルートマッピングは、コンパスと歩測と方眼紙をつかって行う。簡便な方法ではあるが、大まかな調査にはとても役立つ。ブータンの五〇〇〇メートル近くの高原地帯でつくったものの原図をお目にかけてよう（図1）。これでは一日分の行程である。ルートマップをつくりながら旅行すると、ルート沿いの観察を、細かくまんべんなく行えるようになる。旅の楽しみを倍加してくれることは請け合い

である。

エベレストの空撮と地図

一九七四年に、ヒマラヤで氷河調査を始めた頃には、地形図が使えなかったから、どこにどのような氷河があるのかも、かにもく見当がつかなかった。そこでネパールヒマラヤ氷河学術調査隊では、氷河の全貌や地形の細部を知るために、自分たちでネパール航空のB727を1時間チャーターして写真を撮りまくった。高度二万二〇〇〇メートルから見るとヒマラヤ山脈は迫力満点であった。調査隊が撮影した多くの氷河や氷河湖は、その二四年後、朝日新聞社の社有ジェット機「あすか」によって、同じアングルから再度撮影された。これによって、ヒマラヤの氷河がほとんど縮小していることが確認された。

世界最高峰エベレストに関してだけは、イギリスが一九二二年につくった地形図をはじめいくつかの地図があった。一九八八年には合衆国のナショナルリジオグラフィックがすばらしい地形図をつくった。エベレストの地図の空撮写真（写真2）と同じ範囲を示した（図2）。この地図の範囲はネパールと中国にまたがっているため、スペースシャトルの写真から空中三角網



【図1】ブータン=ヒマラヤ、ルナナ南部の高原地帯での岩田のルートマップ。1998年10月10日の行程、北から南に歩いた。

次ページ【図2】エベレストの地形図 "Mount Everest", 1:50,000, National Geographic Society 作成, 1988年。写真2の範囲をカバーする。



MOUNT EVER

South Col

Lhotse

Nuptse

NEPA

Chukhung

Mehtu

Pokalde

Injatsze
Island Peak

Ding Wopla

Chukhung

Ribro

Parashaya Gyab

Garak Shep

Lobuche

Aongma La

Thugla

Phulung Kharga

SCALE 1:50,000
2 CENTIMETERS = 1 KILOMETER OR 1 INCH = 0.79 MILE
Contour interval 40m/Index contours 400m
Altitudes in meters





【写真3】クンプ氷河下流部。岩屑に覆われた氷河表面を右岸側方モレーンから見おろした。1995年10月22日撮影。



【写真2】高度1万2000 mから撮影したエベレスト8848 m.南側のヌプツェの背後にのぞいている頂上からは、風下に山旗雲がたなびいている。左側の谷底の灰色の部分がクンプ氷河。1974年12月24日撮影。©GEN (名古屋大学・日本雪氷学界)。

を組み、あらたに小型ジェット機を飛ばして垂直空中写真を撮影して図化されたものである。スイスの地形図の描法を使った世界最高レベルの地図といえよう。

クンプ氷河の地図

エベレストの空撮写真の左側と地形図の西端にあるのは、灰色の細長いクンプ氷河である。エベレスト登山のルートにもなっている、ヒマラヤ南面を代表する氷河である。この氷河の下流域は岩屑（土砂）におおわれ非常に複雑な地形をしている（写真3）。われわれは一九七三年以来、継続してこの氷河を調査している。一九七八年の夏には二ヶ月かけて測量を行い氷河表面の地形図をつくった。連日、雨や雪の中でトラバース測量と平板測量、地上写真測量を続けた。氷河表面の海拔高度は四七〇〇メートルから五三〇〇メートルに及ぶ。薄い空気の中で疲れる作業であった。その時つくった地図を簡略化したもの（図3）と、同じ範囲の地上写真（写真4）をならべて示す。この写真は一九九五年に再測量したときのものである。最近の再測量はGPS受信機を用いて比較的簡単に行えるようになった。表面高度の低下量（氷河の体積変化がわかる）の測定も簡

単になった。クンプ氷河はどんどん体積を減らしている。

南極での地形図作成作業

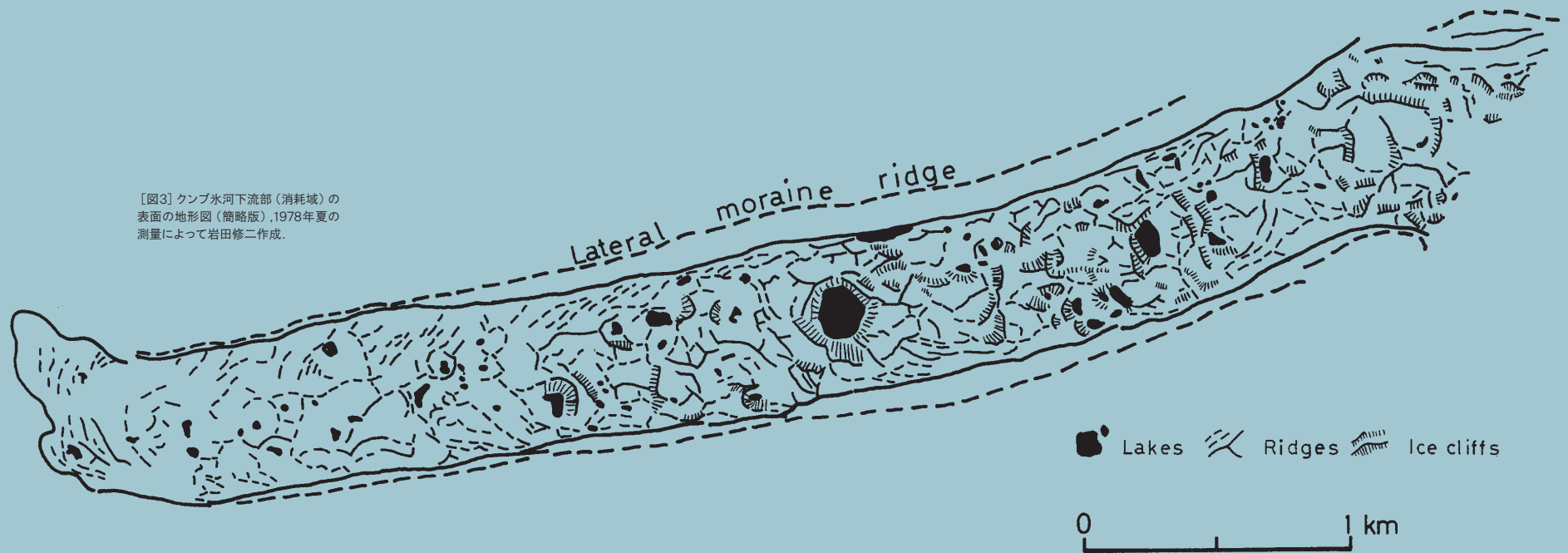
やがて国家レベルの地図づくりに携わる機会がやって来た。南極昭和基地の西約七〇〇キロメートルにはセールロンダーネ山脈という四国くらいの面積の三〇〇〇メートル級の山岳地帯がある。一九三〇年代にノルウェーの探検隊が飛行機から発見し、一九五〇年代にはベルギーの観測隊が地上で調査をおこなったが、地図は、米軍が遠距離から撮影した斜め空中写真でつくった五〇万分の一のものがあるだけだった。そこで、一九八三年から一九九三年まで行われた日本南極地域観測隊によるセールロンダーネ地学調査では山脈全域をカバーする五万分の一地形図を作成した。

一九八四／八五年の南極観測隊員のうち数人は、出発前に房総半島鹿野山の国土地理院の測地観測所に合宿して天測と基準点測量の実習教育を受けた。地理院から派遣される隊員とともに測量作業に従事するためである。セオドライト（経緯儀）を使った天測や光波測距儀による測定、重力測定など学んだ。

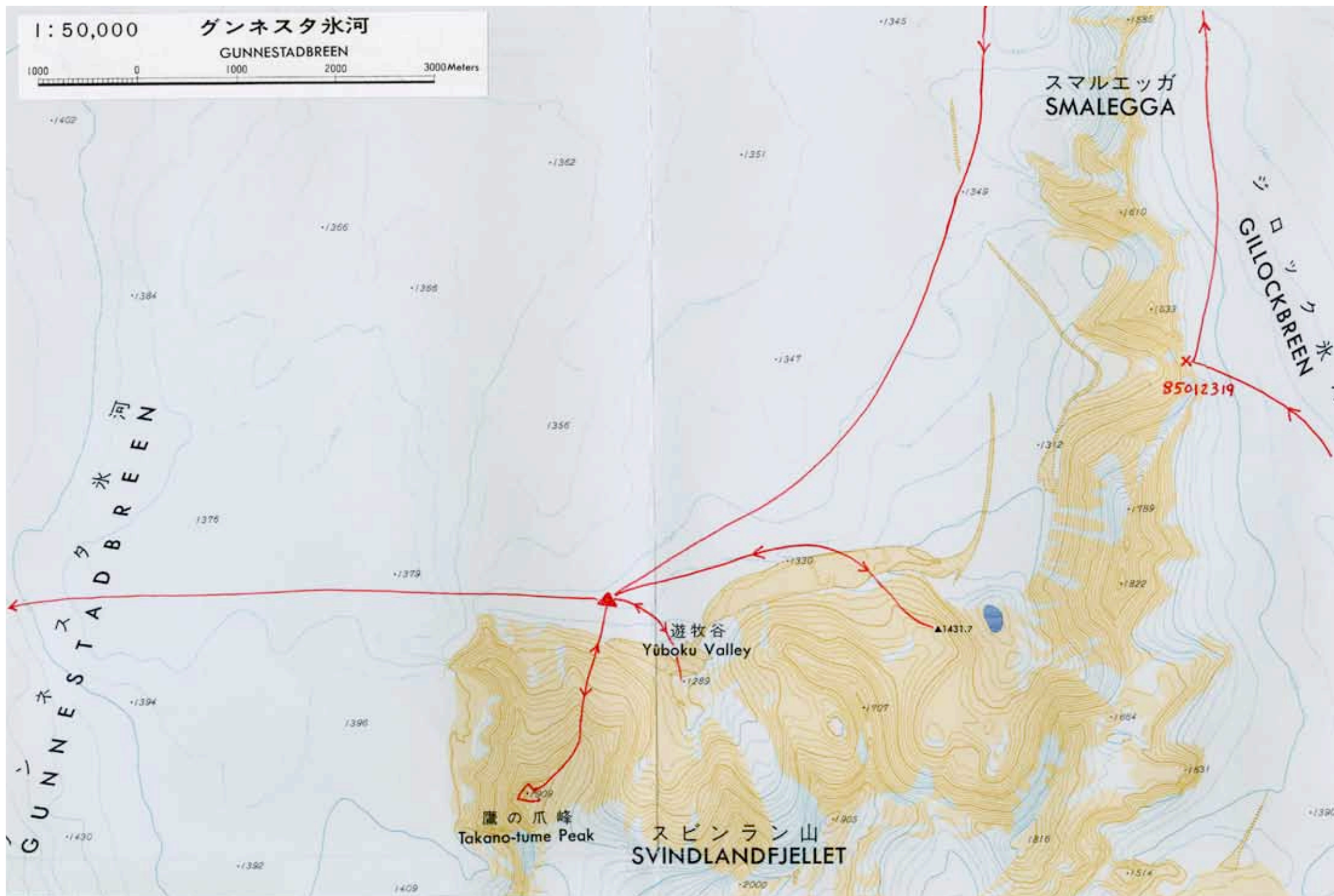
基準点の経緯度はJMRという人工衛星利



[写真4] クンブ氷河東側の山腹5500 mから見おろしたクンブ氷河の下流部。左側が下流。1995年10月撮影。



[図3] クンブ氷河下流部（消耗域）の表面の地形図（簡略版）。1978年夏の測量によって岩田修二作成。



【図4】南極セールロンダーネ山脈の地形図「グンネスタ氷河」1:50,000,建設省国土地理院作成,1991年2月,赤線は1985年1月のわれわれのルート。



下右 [写真5] 南極セールロンダーネ山脈東部クラッケン=ヌナタクの三角点 (26°25'E, 72°00'S, 1312.4 m) の測量キャンプ。三脚上にGPSのアンテナがセットしてある。1991年1月22日撮影。

上 [写真6] セールロンダーネ山脈スマルエツガ山稜 (図4の85012319地点) から西方を望む。遠景はベンゲンからビーデーの山塊。中景左端の山が鷹の爪峰 (1909 m)。1985年1月23日撮影。

下左 [写真7] セールロンダーネ山脈ベルゲルセン山塊の岩峰群。中央左の高い岩峰はヘルナ2427 mで1995年頃にノルウエーのクライマーが登った。1991年1月25日撮影。

岩田修二教授の海外学術調査



岩田修二教授

筆者は50年以上にわたって、高山や極地の調査旅行を続けてきた。氷河地形や山岳環境の研究をおこなうためには当然のことである。むしろ人跡まれな辺境での旅や野外生活をしたいと、この研究テーマを選んだのであった。編集者からのおすすめにしたがって、その経験のみをかきとめた。

- ・1968.11-1969.7 (大学3年生) 南米大陸バタゴニア南水原の未踏の氷河地帯の踏査、ウブサラ氷河上で氷河・氷河地形研究を決意した。その後、アタカマ高地、リオデジャネイロ、ダカール、モンバサなどをへてムンバイからカトマンズ(ゴサインクンド・トレッキング)を経て帰国。
- ・1974-1978 (大学院生) ネパールのクンブヒマラヤで氷河・地形調査(合計13ヶ月滞在；ネパールヒマラヤ氷河学術調査隊)。シェルパとの生活から多くを学んだ。
- ・1980-1982 中央ネパールでヒマラヤの隆起に関する地球科学的調査(合計8ヶ月滞在)。
- ・1982・1985 アイスランドで氷河と凍土の地形調査(教育社「ニュートン」の研究費による)。
- ・1983 中国の天山山脈の氷河地形調査と測量。20年後の2003年に再測量。
- ・1984/85の夏および1990/91の夏、南極地域観測隊(文部省)に参加してセールロンダーネ山脈で地形調査と測量(地形図作成)。あすか基地の建設と合計5ヶ月テントによる移動野外調査。
- ・1987.6-9 中国の崑崙山脈とチベット高原一周の踏査(氷河と凍土の地形調査)。
- ・1989.6-10 中国のチベット高原横断と東南チベットでの氷河地形調査。
- ・1992-1994 中国、横断山脈(雲南省・西蔵自治区)で環境変遷(古環境復元)調査。
- ・1994-1995 ネパール、クンブ地域の環境変動調査とクンブ氷河の地形変化(1970年代の調査の再評価)および観光に関する調査。
- ・1998.9-10 ブータンで氷河湖決壊洪水の危険度評価調査(スノーマントレック沿いを2ヶ月かけて踏査・調査した)。このプロジェクトは現在も継続中で、ほぼ1年おきに現地調査をおこなっている。
- ・2003.3 ペルーでの氷河地形調査(熱帯アンデスの氷河地形研究)。
- ・2005-2007 カラコラム山脈とパミールでの環境評価と山岳自然公園の管理計画のための調査(パキスタン・タジキスタン・キルギス)。
- ・そのほかに韓国・台湾・中国黄土高原・ボルネオ・アメリカ合衆国ハイオ州・ニュージランド・スイス・ノルウエー・スコットランドなどで氷河地形や自然公園・ジオパークの見学旅行をおこなってきた。これらの調査によって得られた成果は拙著『氷河地形学』(東京大学出版会、2011年3月刊行)に反映されている。

用の位置決定装置を用いたが、当時は一点あたり三日間の連続観測をおこなう必要があった。基準点観測をおこなっている間に、キャンプからスノーモビル(雪上オートバイ)に乗って離れた山塊(ヌナタク)に行き、頂上付近の見通しのよい地点に三角点を埋め、反射板を設置する。それを基準点から測量する。同じようなピークが並ぶ山塊では、一〇キロメートルも離れた測定の標識を見つけるのに苦労する。日本では夜間、照明を頼りに測量するが、夜のなしい夏の南極では不可能である。そのとき役立つのは、非常用に携帯していた対空用のシグナルミラーであった。目標の測点から送られて

くるミラーによる太陽の反射光は、双眼鏡を使っても発見できない観測点を発で視準可能にした。一九九〇/九一年の観測隊ではJMRがGPSに替わっており、基準点測量は三時間しかかからなかった。

基準点測量と並行して、昭和基地の越冬隊によって空中写真が撮影され、国土地理院によって図化された。セールロンダーネ山脈をカバーする五万分の一地形図二図幅は、このように、南極観測隊によって測量作業がおこなわれ、国土地理院によって計算・作図され、一九八九年から九二年にかけて印刷された。ただし国立極地研究所の研究経費で印刷された

ための市販はされていない。

それにしても、ナショナルジオグラフィックのエベレストの地図と比べると、この国土地理院のセールロンダーネの地形図はなんと無味乾燥なことか。セールロンダーネ山脈地域は、ノルウエーが領土権を主張しているためノルウェー語の地名が多い。そのなかで「遊牧谷」や「鷹の爪峰」はわれわれが命名し、国際的にも認められた地名である。



それぞれに理由があって所有している安島教授のカメラたち



Kodachromeのパッケージ

カメラで悩む

写真は「記録」か、それ以上のものか

文・写真 安島博幸

誰もが手軽にコンパクトデジカメを使い、写真を楽しめる時代になった。だが、長年数多くのカメラと親しんできた安島博幸教授（観光学部）の悩みは尽きない。「悩める人」のカメラ談義に耳を傾けてみよう。

「悩める人」のカメラ談義

写真との付き合いは長い。小学校5年生の時に、初めて自分用のカメラとして、オリンパスペンSというカメラを買ってもらったのが本格的なカメラと出会いだっただ。当然、いわゆる35mmフィルムを使うのだが、ハーフサイズとってフルサイズのカメラの半分しかフィルムを使わないので、24枚撮りのフィルムなら48枚。36枚撮りなら、72枚の写真が撮れた。現在のフルサイズのデジタル一眼レフに対するAPSCサイズあるいは、フォーサイズサイズと比べていいだろうか。また、このカメラは、オートどころか、露出計も付いていない完全マニュアル機だったから、お天気や被写体の状況を瞬時に判断して、シャッタースピードや絞りを決めなければならなかった。この経験は後にカメラ・写真を仕事や研究で使うようになってからも大いにきた。

さて、記録としての写真やカメラに要求されることは、いくつかある。「保存性」「正確な描写」「携帯性」「特殊な条件での撮影」などである。

だから私がカメラや写真で悩むことがなくなったかと言えば、事態は改善されず、相変わらず「悩める人」なのである。いや、むしろ悩みは日々深くなっている。今、悩んでいる方には、是非、私と悩みを共有していただきたいと思ひ、筆を執った次第である。

まず、保存性であるが、フィルムカメラの時代には、写真的保存には大いに気を使ったのにもかかわらず、失敗しているものも多い。一番がっかりするのは、フィルムの退色である。カラーフィルムは保存状態が悪いとかなり早いスピードで退色が進む。正確な色彩の再現にはリバーサルフィルム（いわゆるスライ

保存性について

ド）が適しており、海外での撮影はリバーサルフィルムを使ったものだが、多くのリバーサルフィルム、コダックのエクタクロームやフジのフジクローム（発色剤を内部に含む）内式現像処理は、10年も経つと相当退色が進んでしまう。これを避けるためには、フィルムとその現像の仕組みがまったく違う（発色剤を外部から補う「外式」）コダックのエクタクロームを使うのが常道であった。しかし、年々リバーサルフィルムを使うプロ・アマの写真家が減少し、ついにコダッククロームの生産も現像処理も中止になってしまった。もし、昔の現像済みのリバーサルフィルムを持っていないなら、早くスキヤンしてデジタル化することを強くお薦めする。

デジタルカメラしか使わない。だから関係がないという人もいるだろうが、それをどのようなメディアと形式で保存するのかは、また難問である。

多くのデジタル媒体では、長期的にデータを保管することが保証されていない。例えば、磁気ディスクと磁気テープは20年で磁気が薄れ、データを保存できなくなる。フラッシュメモリーカードはそれよりやや短い。

私は以前にZIPというメディアを頻繁に

使っており、多くのZIPデイスクを所有していた。ところが、数年ぶりにZIPドライブに挿入して画像を見ようとしたところ、数台のZIPドライブのすべてが故障していた。原因はどこにあるのか分からないが、どこかに致命的な欠陥があったのだと思う。光デイスクであるMOに保存してあったものは読み出すことができてはつとしたが、デイスク自体が既にあまり使われなくなっており、ドライブも新しいものは手に入りにくい。もうこのメディア自体のライフサイクルも終わりにかけている。ハードデイスクも毎日使っていたら、3~5年程度の寿命らしい。ある日、長年蓄積してきた数百GBの写真をいっぺんに失うことにもなりかねない。最悪の事態を想像すると背筋が凍るが、多くの人は楽観的である。何に保存するか。これだけでも悩みは深いのである。

特殊な条件下での撮影

安価なコンパクトデジカメ(略してコンデジ)と高価な一眼レフの違いは、撮影条件が厳しさを増すほど顕著に現れる。暗い、対象が動いている、遠くにある、広い視野を画面に収めたいなどである。

明るいに越したことはない。これらを満たそうとするとレンズは、限りなく大きく、重くなっていく。そうするとそのレンズを付けたカメラは、ヘビー級になる。ちなみに、手輕



中国・広州で珠江の夜景

暗いところでの撮影の代表は、観光の分野では「夜景」である。一度大きな失敗をした。上海の夜景をP社の最新式コンデジで撮影した時のことである。当時としては、最新式コンデジのスペックは抜かんでおり、バンド対岸の浦東の東方明珠タワーなど煌びやかな夜景が写っているはずだった。ところが、帰国してパソコンの大画面で見ると、暗部にはノイズだらけで使い物にならない画像しか撮影できていなかった。これには大いに落胆し、カメラ会社を呪ったものである。この時以来、暗い場所の撮影でISO感度を高めた時の画質に敏感になった。フラッシュを使った記念撮影程度ならほとんど問題はないが、夜景を撮影する時にはISO値を高めた高感度撮影の画質には、充分注意されたい。

上海の夜景を撮影する機会は、それ以来めぐつてこないが、中国・広州で珠江の夜景を撮影する機会があった。主に船からの撮影だったので、以前の経験から、高感度時で暗部にノイズが出ないように、N社の一眼レフカメラにF値の明るいレンズを付けて、ISO値の設定にも心を配り、手ぶれを起こさないようなシャッタースピードで撮影した。同行した人がコンデジで撮影した写真はすべてさらに、一眼レフは重くなる。

結局、一眼レフは伊達に重いのではなく、携帯性を除く、あらゆる点で性能が高く、良い写真が撮れることとは間違いない。被写体が動いている、暗い、超広角、超望遠など撮影条件が不利になるほど威力を発揮する。

しかし、旅のお供をさせるカメラとしては、1kgを超えると相当に邪



「悩める人」安島博幸教授

ブレとノイズで見るとも無惨だったが、私は失敗の経験が活きて、気をつけて撮影をしたので、かなり引き伸ばしても問題がない写真を撮ることができた。

ホテルの部屋を、狭い道に建つ高い建物を、建設中の東京スカイツリーを近くから、1枚の写真に収めたいと思うと、対象が画面からはみ出してしまつて困ることがある。このような時には、広角レンズが必要である。ここでもやはりレンズの交換できる一眼レフが都合がいい。一度広い範囲が気持ちよく収まる超広角レンズを経験すると、手放せなくなるのであるが、普通に記念撮影をしようとするときには、対象が小さくなりすぎて面白くない。やはり超広角の領域から一般的によく使う画角までをカバーするズームレンズが便利である。

携帯性について

旅の途中で出会う様々な条件の場面で、必要な機能は、夜景の場合にはレンズが明るいこと、カメラのISO感度が高いことが望ましい。都市の路地や高層建築の撮影、またホテルの部屋などの室内の撮影には、画角が広いことが必須の条件である。できればF値も

魔だし、首も疲れる。コンデジに求められるよりも高い要求にも応えられ、フル装備の一眼レフよりも携帯性が良いカメラが当然欲しくなる。このあたりを狙いますして投入されたのが、ミラーレス一眼という新しい規格のカメラである。重さで言えば、500gくらいである。ちょうど携帯性と機能性の折り合いがつくあたりに投げ込まれて、見事打ちとられてしまう人が続出しているようだ。実は私もその1人であるが。

斯くして、いつ巡ってくるかもしれないシャッターチャンスに備えようとするれば、カメラは複数のタイプのもを所有する必然性がある。考えてみれば、同じ理由でアナログ時代も異なるタイプのカメラを所有していたのだった。(18ページの写真——それぞれに理由があって私が所有している(していた)カメラ)

「記録」か、それ以上のものか

基本的に、私が写真を撮る目的は、「記録」のためである。では、他にどんな目的があるのだろうか。目的を分けると、次の3つのタイプになるのではないかと思っ

ている。必要なカメラの性能についても簡単に書いておくが、どの目的であっても、携帯性、保存性、などは基本的に求められる条件である。

1 思い出・記念 旅先での人物を入れた記

念写真・パーティーなどイベントを撮影記憶・回想したもの。コンパクトなデジタルカメラ、または携帯電話に付属するカメラで撮影。スナップショットや記念写真、集合写真

2 記録・資料 調査記録・研究のための資料・

旅行記・日記など。できるだけ、主観を交えずに正確に、詳細に記録する。定点観測やコレクションのように、比較ができるように撮影。デジタル一眼レフなどできるだけ、不利な撮影条件の下でも、記録できる性能が求められる。

3 作品・アート 風景写真・建築・遺跡な

ど様々な旅先で出会う観光対象をモチーフとする作品。新たな視点から美を発見し、人を感動させることを目的とする写

真。カメラに求められる性能は、作品の性質によるが、一般的には記録・資料用よりもさらに高機能。高性能。レンズにボケ具合など味を求めたりするので、ややこしい。

しかし、よくよく考えてみると、この3つの分類は、境が曖昧である。私自身についても、「記録」目的で写真を撮っているが、と割り切って書いてきたが、実は一番の悩みは自分が今、撮っている写真は「記録」なのか、それ以上のもの、すなわち「作品」なのかという点である。元々は、「記録」写真のつもりで撮っているのだが、できれば、人に見せたときに感動を与えられる写真を撮りたい、ひょっとしたら風景写真コンクールに応募するかもしれない、ポスターなどに大きく引き伸ばして使いたいなどという下心が無意識に作用しているようである。おそらく写真好き、カメラ好きと言われる人は、「思い出」——「記録」——「作品」の間を揺れ動き、悩みながら、楽しんでいっているのではないか。

さて、最後に私の撮影した「記録」写真に

ついて紹介しておきたい。私は長い間、別荘の歴史的研究をしてきたので、いくつかが、記録として重要な写真を撮っていたことがある。その一つは、湘南で撮影した古い別荘の写真で、ロシア革命で日本に亡命してきたバレリーナのアンナ・パブロワのものである。1984年に調査をしていて撮影したものである。海岸近くに海がパノラマのように見えるように別荘を構えるのは、欧米人の特徴をよく表している事例として論文の中で取り上げたこともある。しかし、その後、この建物は老朽化が進みいつの間にか取り壊されてしまった。2000年頃に湘南にある歴史的な別荘建築群が話題になったとき、私の撮影したものしか残されておらず、貴重な記録として写真を提供して感謝されたことがある。この他にも今では取り壊されてしまったり、焼失してしまったり貴重な別荘の写真が手許に残っている。また、リゾートブームの頃、フランス・コートダジュールは、ニースの超高級ホテルに泊まったことがある。そのホテルの部屋から撮影した海岸の風景は、偶然にも1930年代に撮影された絵がきと同じアングルで、風景にも年季が入っているのを思い知った1枚だった。



バレリーナ・アンナ・パブロワの別荘（1984年撮影）



1980年代に撮影した
フランス・コートダジュール

1930年代のフランス・コートダジュール



インターネットで 旅の記録を共有する

豹変するバンコクの相貌

文・写真 稲垣勉

研究休暇でバンコク滞在中の2010年3月、赤シャツ派（UDD：反独裁民主戦線）の反乱が起きた。その占拠地の中で暮らした稲垣勉教授（観光学部）が一年間配信し続けたメールマガジンは、赤シャツ派とともに豹変する、都市の相貌についての記録であった。

異国における生活の記録

昨年九月までの一年間、筆者はバンコクで暮らし、タマサート大学での大学院授業のかたわら、タイ国内はもろろ隣諸国での調査に出かけるという生活を送っていた。フィールドワーカーにとって記録は何にもまして重要である。多くの場合フィールドワーカーの記録は、ノートに書き付けられ、写真として整理され、録音として残される。今回も調査結果はこのようなして蓄積されていた。一方で調査行を含む、異国における生活の記録は、別のかたちでも記録され発信された。別のかたちは、友人、知人、同僚などを対象にしたメールマガジンである。

この期間のメールマガジンは号外も含めて六七号、その後何回かタイ渡航をする機会があり、その時に送った補遺も含めればゆうに七〇号を超えるメールマガジンが、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオスさらには中国から発信された。まさに旅の記録を綴ったメールマガジンで

ある。メールマガジンを始めたきっかけは単純である。経済成長とともに急速に変化していくバンコクの「現在」を記録しておきたい、同時にちょっとした好奇心からタイ生活の「おやつ？」と思ったことなどを、親しい人々と共有したいという、あくまでも軽い気持ちがもとになっている。

メルマガの速報性と双方向性

周辺国、タイ国内での調査が進むにつれ、メールマガジンとして発信される旅の記録は、バンコクの現在を相対化し、むしろ東南アジア世界、さらにはタイ国内におけるバンコクの特異性についての記述が増加していくこととなった。これは二〇一〇年三月を境により明確なカタチをとり始める。UDD（反独裁民主戦線）いわゆる赤シャツ派の大規模反政府活動が始まり、彼ら抜きではバンコク生活を語る事が出来なくなる。赤シャツ派の大衆運動は、表面的にはタクシンと反タクシンという政治的対立であるが、その裏に潜んでいるのはバンコクと東北部・北部という地域対立であり、官僚・軍エリートなど旧支配層、都市中産階級と都市下層民、その母体である農民層との階級対立である。さらには前近代的な私怨

新興宗派と既存仏教組織の対立、経済界の思惑も含めてきわめて複雑な構造を持っている。支配階級とされる官僚、軍部も一枚岩ではない。高級官僚、高級軍人の中にも隠れ赤シャツ派は少なくないと言われている。

ところで赤シャツ派による反政府活動の盛り上がりは、メールマガジンという記録、情報発信形態の特性を際立たせることになった。通常であればフィールドワーカーの記録は、文献、資料と対照され、吟味を加えてはじめて論文や単行書として結実する。これに対してメールマガジンの特質は速報性である。論理構成や事実の吟味より、観察した事実や入手した情報を即時に伝達することの重要性が勝るときに力を発揮するメディアであろう。治安部隊と赤シャツ派とが初めて大規模衝突し、日本人ジャーナリストを含む二〇人以上の犠牲者が発生した二〇一〇年四月一〇日の



上/BTS高架下を占拠する赤シャツ派 下左/サーヤム・スクエアのタイヤバリケード 下右/巨大スクリーンに見入る集会参加者

夜には、合計三通のメールマガジンが発信された。

これらの通信は、テレビなど国内メディアの報道や自宅周辺で生じた様々な出来事をもとに、刻々と変化する状況を記録したものである。現地バンコクにおいても情報は錯綜していた。しかし仲間の死を悼む、赤シャツ派による葬送曲が大音量で流れる中で送られたこれらのメールマガジンは、現場のリアリティを即時的に日本に伝える役割を果たしたと考えている。これに対して相当数の反応が日本から送られてきた。筆者の身を案じる内容が多かったものの、バンコクで実際何が起きているのかを尋ねるメールも少なくなかった。記録とその配信にもなう双方方向性は、コンピュータネットワークのもう一つの大きな特徴であろう。

バンコクでの自宅はラーチャプラソンという中心街にあった。日本人の居住地区として有名なスクンウィット通りが中心部に入るとプロンチット通りと名前が変わる。プロンチット通りが、シロム交差点からルンピニ公園の脇を抜けて北上してくるラーチャダムリ通りと交差するところがラーチャプラソン交差

で占拠地に居残り、日々の観察を記録に残すことを選んだ。

出勤の合間を縫って占拠地内をくまなく歩き、そのうち顔なじみの人たちも出来てくる。参与観察による、いわば赤シャツ派の民族誌が書かれていった。記録には赤シャツ派の上京から治安部隊による強制排除、さらには排除後に発生した騒乱とバンコクの人々の反応、占拠地域の後片付けから、その後のバンコク出張で遭遇したUDDによる大規模抗議行動までが含まれている。占拠の最終段階では治安部隊との間で戦闘状態が生じ、絶え間なく黒煙が上がり、爆発音やM16カービン銃の連続する発射音が夜通し聞こえた。激しい戦闘が行われたプラトウナム交差点(ラーチャプラソン交差点からひとつ北の交差点)付近では、擲弾が爆発するオレンジ色の閃光を自宅からもはつきり見ることができた。記録はこうし



点である。プロンチット通りはここでラーマ一世通りと再び名前を変え、わずかに進めばバンコクの竹下通りと言われる若者の街サヤム・スクエア、反対側は高級



デパートのラゴン、近くには庶民派のショッピングセンター、マーブン・クロン・センターなどが立地している。ラーチャプラソンにもハイアット、インターコンチネンタルホテルが立地し、

占拠地で赤シャツ派と暮らす

三月二日前後、東北部、北部から続々と上京した赤シャツ派本隊は、当初王宮前広場に本拠地を設けた。ほどなく民主記念塔、パ

た状況下でも続き、この間に撮影された写真は700枚あまり、記録の一部はメールマガジンとして即時に配信された。占拠関係のメールマガジンは三〇号を上回る。

赤シャツ派占拠地域内で、筆者が観察した状況は通常、騒乱という言葉から連想されるものとは大きく隔たっていた。わずかのアノミー状態を経て、占拠地内では権力が確立し共同体的規範が成立していった。どのように激動するバンコクが記録され、配信されていたのか、実際のメールマガジンの一部を引用しながら、少しだけ見ていくことにしよう。

赤シャツ派がラーチャプラソン交差点に移動してきたのは、前述の通り四月三日、その後四月一〇日夜の大規模な衝突を経て、全体がラーチャプラソン交差点に集結し、水掛けで知られるソックライン(タイ正月)にはある安定した状態に至った。

ンファア橋から旧国会議事堂に続くラーチャダムヌーン・ノークという通りに移動し、さらに四月三日、第二の拠点としてラーチャプラソン交差点を占拠した。その後赤シャツ派はラーチャダムヌーン・ノークの拠点を撤収しラーチャプラソン交差点に集結する。交差点には巨大な演壇が設けられ、UDDの司令部も移転してくる。演壇から自宅までは直線距離にして二〇〇米もない。この時から強制排除に至る五〇日ほどの間、ベトナムと中国に講義に出かけた一時期を除き、占拠地の真ん中で赤シャツ派と一緒に暮らすこととなった。交差点に隣接する大規模商業施設の多くが休業し、日々の食料品・日用品の買い物にも事欠く一方、最終段階を除いて占拠地域内は大音量の演説や音楽以外いたって平穏、高架鉄道BTSを使つての通勤や外部への買い出しは何の問題もないという不思議な生活が続いた。そこに成立していたのは、グローバル都市バンコクの中に突然生まれた農村型自治コミュニティであり、時々刻々とそれは変化していった。こうした状況に遭遇し、ましてやその中で暮らす機会はいわゆる好機と云うべき事象である。筆者は生活の不便をしの

ラーチャプラソン交差点はアジール状態です。あまり見たことがない路上生活者然とした人々も集まっています。網野善彦の世界が現実に出現しているのを見る好機です。でも彼らは端の部分にいて、中心部にはいません。いつもいるいわゆる物乞いはどこかに消えてしまいました。彼らは組織化されたビジネスだと言われている。アジールの中では生きていけないのです。

日本でお考えの状況とは大きく異なります。北東アジアの常識では、こうした場合、都市全体が騒然とした雰囲気包まれるのではないかと思います。バンコクでは一〇万人程度なら半径1km程度が大騒ぎして、その外側は普通の状態です。一三日午後現在、状況はきわめて安定しており、人が二〇人も亡くなったとは思えない状態で、赤シャツ派は水掛祭りの最中です。すでにラーチャプラソン交差点は観光地化

上/騒乱の中、バイクに乗った10代の若者たちに放火され、ほぼ全焼したセンター・ワン・ショッピングセンター(戦勝記念塔)
下/強制排除後、警備にあたる治安部隊



しており、かなりの観光客がカメラ片手に訪れています。死亡現場もすでに観光地化のようです。これがタイなのかも知れません。

その後、周辺部で何回かの小競り合いがあり、水面下での政治的交渉によって、アピシット首相は国会解散を含む解決への五項目のロードマップを発表して、誰もが解決への望みを持ち始める。雨季入りを前にした五月初め、赤シャツ派はかなり減少したものの、UDDによる占拠地の統治機構は整備され、占拠地内はイサーン・北部的な農村コミュニティの様相を呈し始める。

実際に占拠地内で暮らしてみると、バンコクの中に別の政治権力が成立し、竹槍・タイヤバリケードで国境が出来てしまった印象です。内部では食事無料、食事ばかりか飲み物、時としてデザートも無料です。われわれ外国人も貰えます。医療も無料です。(中略) 食料や水は陸続として運び込まれます。炊き出しセンターに食材状態で持ち込まれる場合と、出来上がったものを持ち込んでくる場合があります。外部に相当なサポーターがいるようです。外部サポーターは差し入れの時に、結構子供を連れてきて

五月二七日を期限として政府は赤シャツ派に退去の最後通告を行うが、ほとんどの人々は退去応じる気配がない。しかし筆者はバンコクで籍を置いていたタマサート大学の同僚達に迷惑を掛ける訳にはいかないと、退去を決心し短時間で荷物をまとめて、占拠地から脱出した。

自宅からbronchitt通りに出て、給食センターの人たちに目で挨拶、チットロム交差点までは緊張していましたが、人々は落ち着いていました。チットロム交差点から、ナナの高速下り口まで、1km以上、ほぼ無人の8車線道路を歩きました。いつもなら車や人でいっぱい道の道です。異様な感じと、不思議な開放感のある光景でした。二度とbronchitt通りのご真ん中を歩くことはあるまいと思いまし

手伝わせています。いまはお休み時期ですので、小学生くらいの子供が赤はちまきや赤スカーフで飲み物などを配っています。親たちはイサーンでありランナであるアイデンティティを学ばせているように思われます。同時にバンコク在住の多少羽振りの良いイサーン、北部出身者はこの機会に寄付しないと、あとで白い目で見られるのかも知れません。

ありとあらゆるところが物干し状態です。昨日は朝は良い天気でしたが、午後になってバケツをひっくり返したような大雨になりました。ぼくは20m程距離のある屋根なし部分を歩くことが出来ず、反対側の開いているアマリンプラザのフードコートで雨宿りしながら下を観察していました。テントから滝のように雨水が流れ落ちていきます。一人の赤シャツの男性がタオルを持って短パン一枚で流れ落ちる水でシャワーを浴びはじめました。多分故郷ではこんな調子なのでしょう。恵みの雨といった調子です。毛沢東が泣いて喜びそうな、農村が都市を包囲する瞬間を見たいました。

占領地からの脱出

しかしUDD内の強硬派が妥協に反対し、あとで振り返ると、いろいろなことを考えさせられる光景でした。

強制排除とその後

二日後に強制排除が始まり、避難先からは証券取引所、TV局などが炎上する黒煙が眺められた。ネットワークが遮断される中、これらの状況もメールマガジンとして発信された。筆者が自宅に戻ったのは脱出後一週間目であった。東南アジア第二のショッピングセンターをはじめ、占拠地域のそこそこは破壊され焼失していた。しかし日本での報道のように無差別な破壊活動ではなく、むしろ特定の資本系列を狙った統御された組織的な破壊活動だったように思われる。排除後の占拠地域の有様、清掃ボランティアなどの様子も、記録され配信された。



BKK Now 号外28 (2010年5月23日 18:17現地時間発信)

政府も妥協案を撤回して、五月一〇日過ぎからは強制排除に向けた動きが加速化し始める。治安部隊が占拠地域を包囲し、水道、電力などのインフラを遮断するという噂の中、高架鉄道BTSも断続的な運休を余儀なくされる。

わが家は電気、水道も普段通りです。ネットも問題なくつながっています。(中略) 自宅に在る限り、いつもと変わりません。ただBTSはスクンウィット線のアソークラチャテウィ間、シーロム線のチヨンノンシー国立競技場間を除いた運行です。主要道路も封鎖中で、バンコクの東西は分断された格好です。(中略) とはいえ通行したら罰金、禁固のはずのベップリ通りも普通に車が行き交っています。

占拠地帯はかつてない程の支援者であふれています。抗議の人波はラーチャプラソン交差点から伊勢丹前までだそうで、(中略) 普段、演芸企画で人が集まっている時と比べても3倍ほどでしょう。現在は周辺部で衝突が続いているようです。日本大使館は衝突現場になってしまい、午後の業務を中止し、大使館に近づかないようメールを送ってきました。



筆者は二〇一〇年末、ラオスでの調査旅行の帰路、打ち合わせのためバンコクに立ち寄った。大晦日の夜、ラーチャプラソン交差点は多くの人々で賑わっていた。かつて赤シャツを着て占拠地内で商売し、強制排除の直前まで赤シャツ派の食生活を支えたイサーン屋台の人々は、来る年の干支、ウサギの耳をつけて買い物客に愛想を振りまいていた。しかし時が来れば、彼らはまた赤シャツを着て、赤いスカーフを巻いてシユプレヒコールを挙げるだろう。新年早々の二〇日、赤シャツ派はラーチャプラソン交差点で、抗議集会を実行し参加者は数方に達した。まだまだ記録し、伝えるべき事実は山積している。

占拠地帯はかつてない程の支援者であふれています。抗議の人波はラーチャプラソン交差点から伊勢丹前までだそうで、(中略) 普段、演芸企画で人が集まっている時と比べても3倍ほどでしょう。現在は周辺部で衝突が続いているようです。日本大使館は衝突現場になってしまい、午後の業務を中止し、大使館に近づかないようメールを送ってきました。



長野・志賀高原における 観光地としての新たな魅力づくり

庄司研究室（観光学部観光学科）

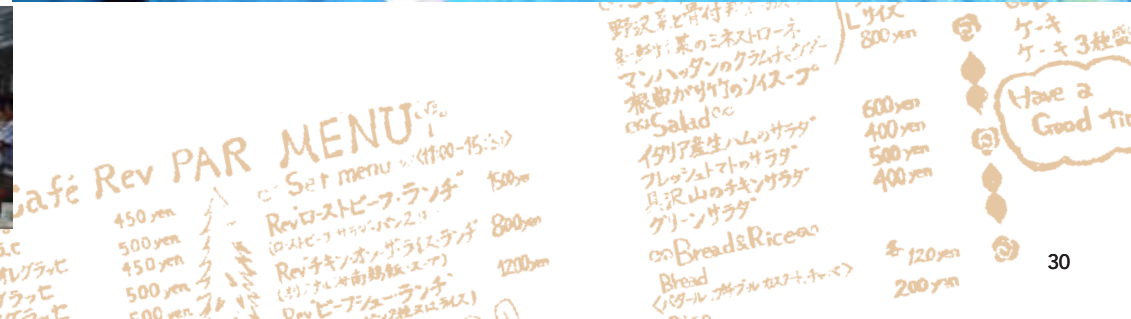


学生が主役、プランを実践へ 庄司貴行

庄司ゼミでは二〇二〇年以降、長野県の志賀高原をフィールドとして、「観光地としての新たな魅力づくり」・「観光ビジネスにおけるイノベーション」をテーマとして研究している。これまでも観光協会などの地元関連組織と連携し、フィールド調査やインターンシップ、合同勉強会などで現地との関係を構築してきた。志賀高原は国内最大級の規模と知名度を誇るスキー場であるが、スキー人口そのものの減少もあり、近年は観光地としてかならずも「元氣」とは言えない。そうしたなか長野県の「温泉地・スキー場地区再生モデル事業」に選定され、本格的に志賀高原の再生を目指すことになった。本ゼミではこの事業に協力し、その二〇二〇年度夏季実証実験に参画した。

「志賀高原の新たな楽しみ方」の提案として、トレッキングを楽しむ若い女性層として近年注目を集める「山ガール」に注目し、さらには地元ホテルと提携し、宿泊客を対象として朝食の代わりにプランチを提供する試みを実践した。具体的には、東館山頂のゴンドラ駅二階部分を賃借し、カフェ『レフパー Rev PAR』を開設・経営した。営業は二〇二〇年八月三日から八月二十九日まで、営業時間は午前九時から午後四までであった。調理に専門家を依頼した以外は、前年十月の準備スタートから、ゼミ所属の二三年生がすべてを担当した。メニュー開発ではマーケット調査と並行して志賀高原周辺の食材を調査し、トレッキング関連の団体・雑誌社などにもヒアリングを実施した。店舗の設計ではテーブルやカウンター、看板の制作を大学キャンパス内で行い、食器の買い出し・梱包作業などにも追われた。またプレス・リリースを作成してマス・メディア各社に連絡、取材依頼する一方で、ホームページやブログを開設してPR活動を行った。総勢十八名の学生が参加し、八月の営業期間中はひとり二週間ずつのシフト制で現地に泊まり込んで実際の営業活動を担当した。

今回の成果については、初めてのしかも一カ月だけの営業ということもあり、ことに「新たな楽しみ方」の提案」ということについて、残念ながら現時点でその評価は難しい。しかし今回の実績として、一日平均百名の集客があり、客単価約千円、一日平均十万円以上を売り上げる規模を達成した。これらの数字はすべて前年を上回るということになったが、なにより学生にとっては大変責任の重い、貴重な経験と呼べる事業規模であったことは間違いない。



「志賀高原の新たな楽しみ方」の提案

ゼミ所属の2・3年生が開設した
カフェ『レブパー (RevPAR)』の経営
2010年8月3日～8月29日



貴重な経験

私は今回のプロジェクトの中で、店舗運営・オペレーションを担当しました。食器など備品の調達、接客のシステムや店舗デザインの考案が実際の業務です。営業期間中は、毎日お客様からのアンケートを集計し、ミーティングを行い、お客様の声を反映させて業務改善を行いました。これらの仕事を通して、多くの社会人の方と関わることができ、社会人の方と仕事をする際、緻密な準備と人に共感を与える誠実さが必要であるということを学びました。こうした勉強をゼミですることができ、本当に良かったと思っています。

(一條裕香 3年)

観光地における新しい朝食のとり方を提案

今回、観光地に新しい風を吹かせようという思いのもとに、地元ホテルとの提携による“ランチシステム”を我々の店に導入しました。これはホテルでの朝食の代わりに、我々が営業するカフェで宿泊者に少し遅い朝食を提供するという企画です。この提案は、「朝食はホテルで、決まった時間に」という紋切り型にこだわらない、観光地における自由な過ごし方を提案する試験プランであり、地元関係者との協力により実現したことで、地元メディアの注目を集めました。

(小倉尚之 3年)

志賀高原に山ガールをよぼう!

「五感で楽しむ山ガールの隠れ家」このコンセプトに行き着くまで、私は統計資料を調べ、現地で客層に関するヒアリングを行いました。その結果から、若年層のとり込み、来訪のきっかけを仕掛けるのを感じ、そのなかで自然・トレッキングコースといった観光資源の強みも活かせる、アウトドアをおしゃれに楽しむ「山ガール」という存在に出会いました。そして関連企業やイベントをさらに調査し、「リード・ユーザー」と呼べるような人たちと意見交換をした結果、店内に山ガールのブースを設けることになりました。私は、今回の活動で答えのない課題に、自分で答えを出す難しさと楽しさを学びました。

(小川理恵 3年)

インタビュー 旅をノートに綴る

語り手 松村公明 写真 松岡宏大

2005年の冬、立教大学に赴任するため引越しの準備をしていたとき、封印された段ボール箱から見つかった5冊のノート。そこには、松村公明教授（観光学部）が学生時代に乘った乗り物の日々の行程がぎっしりと書き込まれていた。今からおよそ30年前の旅を松村教授と一緒に回想しながら、旅を記録することの意味を考えてみた。

乗り物に毎日乗る暮らし

—それぞれのノートには異なるタイトルが付いていますね。

個人的な話で気恥ずかしいばかりですが、最初の1冊目が「交通日誌」、以降「旅の日誌」、

「旅行記」、「紀行」と続き、最後の5冊目が文字どおり「最終列車」です。1冊が1年分の行程記録になっていますが、各タイトルに深い意味はありません。

高校時代までを過ごした京都では、もっぱら自転車で駆け回る生活でしたが、東京での

大学生活が始まると、通学はもちろんのこと、毎日のように電車やバスに乗っていることに気がつき、この暮らしを乗り物の行程で綴れないかと思いついたのがきっかけです。三日坊主を恐れずに、最初から100枚綴りのぶ厚いノートを買ってきて、表紙いっぱいには夕

イトルを記していることに、青春時代の無謀さを感じてしまいます。1冊目の「交通日誌」は、大学に入学しておよそ半年を経たある日のこと、

1982年10月17日

等々力↓二子玉川園↓宮前平

青葉台↓二子玉川園↓等々力

今では全く記憶にない1日の行程から唐突に始まっています。等々力というのは東急大井町線の小さな駅で、等々力渓谷だけではなく私の下宿の最寄り駅ですから、毎日の行程は、ここに始まりここに終わるのが基本的なパターンです。宮前平（東急田園都市線）と青葉台（同）は、ラグビーのサークル活動に関係するものと推定されます。

結果的には、1冊目の「交通日誌」に97枚を費やしていますので、ぶ厚いノートを用意したことは先見の明があったともいえますが、その後5年間にわたる毎日の行程が、一日も欠かさず書き込まれることになるのは想像できませんでした。自分で考えた凡例に従って統一した記載方法で貰かれており、これは巡り巡って現在のフィールドノートの書き方に反映していると思います。今になって

みると、大学入学と同時に書き始めたかったことを後悔する一方で、あまりにも正直な記録のため、5年間で終わっていることに胸をなで下ろすばかりです。

降りるより乗り続けるほうが楽しい

—当時どんなことを考えながら乗り物に乗っていたのですか。

日常の行程は散歩と同じく、次の曲がり角を右に行こうか左に行こうかという気まぐれです。東京ではいくら乗っても降りても初めての場所が無限にあつて、場所への好奇心を次から次へと充たしてくれました。バスは想定外の隘路に入り込み、これに乗らなければ一生目にするはずのなかつた風景の中を、当たり前のように運ばれていく。しかし同時に、電車やバスには必ず行き先があり、思いのままに乗り換えて行きたい気持ちと、路線の終点まで見届けたい気持ちとの葛藤は常にありました。乗り物がいったい毎日どこからやって来てどこへ行くのか、自分の目で確かめた。今でも毎日の通勤で乗り降りする電車やバスでは、いつもの駅やバス停を通り越して、しばしば全区間を乗り通すことがあります。日常的に乗り降りする区間が、その乗り

物にとっては端っここのほんのわずかの区間であると実感することは、今なお興味深いことです。

—いちばん最初に

旅に出たのはいつですか？

1982年11月26日、東京発宮崎行きの特急寝台「富士」で九州へ出発しました。東京を夕方18時00分に出て、宮崎着が翌日の15時50分ですから、当時としても常識的には非効率きわまりない列車でした。でも非効率な行程が旅を豊かなものにしてくれたと思います。

このときの旅は、「富士」を含めて車中6連泊と、最初の旅らしく控え目に思えます。宮崎に着いた日の夜は、西鹿児島（現鹿児島中央）から夜行急行で北上し、翌朝は小倉で降りています。降りるやいなや佐世保へ向かい、夜は長崎発の夜行ドン行に乗って、翌朝は博多で降りています。すぐに博多から熊本へ向かい、肥薩線回りで宮崎へ。その夜は宮

松村教授の旅のノート5冊



崎から夜行急行で翌朝小倉へ…。このように車中泊といっても、東京―九州間の長距離列車ばかりではなく、当時は地方の内部で完結する夜行列車が旅を助けてくれました。たとえば、門司港―西鹿兒島間には、鹿兒島線回りの夜行急行「かいもん」と、日豊線回りの夜行急行「日南」に加え、門司港―長崎―佐世保間には夜行ドン行「ながさき」までありました。ですから、日中には九州のどこにしよう、夕方には数時間をかけていずれかの始発駅まで夜行列車を迎えに行くという方法です。当時のワイド周遊券は学生の旅には欠かせないもので、たとえば、東京発の「九州ワイド周遊券」は、学割で18800円、20日間の有効期間内は、九州内の国鉄線・国鉄バスでは特急・急行の自由席を含めて乗り放題でした。

北海道や四国でも同じことができました。たとえば1986年2月には、四国の中だけで車中7連泊の旅をしています。高松発、高知行きの夜行快速で夜を過ごしています。これらの列車は既になぜか下り列車しかなく、夕方になると必ず高松へ向かって引き返さなければなりません。一方、東北と北陸、山

陰では、夜行列車が地方を飛び出して上野や大阪、博多などへ向かうため、常に寝過ごす不安を抱えていました。それでも、深夜に上り列車から下り列車に乗り移るなど、旅を続けるためにさまざまな工夫を凝らす余地がありました。

夜行列車の固い座席で車中連泊を続けるためには、日中は車窓の景色を眺め、絶対にウトウトしないことがコツで、車中泊も3泊目を過ぎたあたりから適応するの、旅を終えて等々力の下宿へ戻ると、かえって眠れなくなっただけを覚えています。食事は3食ともに駅の立ち食いそば、入浴は交番で尋ねて銭湯に通いましたから、周遊券代さえ捻出すればいつでも旅立つことができました。とは言っても、私は大学生協で国鉄の切符を分割払いする唯一の学生と呼ばれていました。

再訪して気づく町の変化

――印象に残っている旅の思い出はありますか。

1984年2月26日
釧路9…38↓
急行しれとこ2号↓12…50網走
川湯から30位のアベック。いかつい。お菓

だまだ駅前には食堂があり、町なかには賑やかとは言えないまでも、どことなく風格のある中心街があって、決まってカレーとピラフとサンドイッチを出す喫茶店がありました。そんなお店に入っては、ノートと時刻表を開いていました。ノートには、駅から中心街までの略図がよくスケッチされていますし、行程を練り直すのも喫茶店での重要な仕事でした。旅立つ前には緻密な行程表を作るのが何よりも楽しみなのですが、気の合った街で滞在時間を延長するだけでも、その後の行程は大きく変わります。喫茶店を出ると、城山のような小高い山を探し歩いては登り、市街を一望して満足した後、駅に向かっていきます。

かつて降り立った街を久しぶりに訪れると、当時の景色がよみがえり、知らず知らずのう

ちに辿っているのは、やはり前に歩いた道筋です。郊外化によって市街の輪郭や周辺部の景観はすいぶん変わってしまいましたが、駅前から中心街に向かう明治期以来の市街の骨格は、基本的に変わってないことがわかります。ただ、駅前食堂も中心街の喫茶店も今はなく、カラ―舗装ですっかり小綺麗になった通りに、すれ違う人の姿も稀になりました。それでも、立ち食いそばの合間にお世話になった街角のマクドナルドだけは、当時と変わらず同じ場所にあたりして、秘かな思い出にしていたのですが、この1～2年の間に地方都市の町なかから次々に姿を消しています。私の旅にとって、中心街とは地元の人をふりして埋没できる魅力的な場所でしたが、最近では小都市の中心街へ向かうことに気後

子をくれた。コーヒーも3つ頼んで1つくれた。紋別の漁師で素朴な人だ。気さくな人だ。(旅の日記より)

これは北海道車中8連泊の途中です。私の旅は、車窓の景色をただ延々と眺めることに尽きると考えていました。そのために進行方向左側の座席を取るが、右側の座席を取るが一番の関心事でしたし、さらには、隣りや向かいの座席には、できるだけ無口で無愛想な人が座ってくれるよう心から願っていたはずでした。ところが、ノートには相席になった人たちの様子が思いのほか記されており、実際にはさまざまな人たちと話をしながら旅していたことがわかります。私は学生時代の旅をとおして1枚の写真も撮っていないのですが、ノートに綴られた筆跡には、鉛筆を握った指の記憶が刻まれているように思えます。デジタルカメラの記憶について頼ってしまう。最近の旅を反省しているところです。

――駅を降りて街を歩くことはないのですか。私の旅は街を目指す旅でもありません。街の賑わいを想像しながら中心街へ向かっています。1980年代前半には、小さな町にもま

れするようにになりました。地元の人、駅前に並んだ迎える車で瞬間に走り去ってしまうのですから。

役立つかどうかは不明

――こうした旅はその後の先生の研究につながったのですか。

大学では東洋史を専攻していたにもかかわらず、卒業後に地理学を志したことは、やみくもに旅ができた環境が基盤となっています。都市を研究対象としていますが、交通革新と拠点都市、鉄道駅の配置と都市の移動、旅行客の流動に着目するのは、記憶の底に眠る旅の経験が背景になっているかも知れません。これらのノートは、旅をとおして場所を記録することの意味を改めて教えてくれるような気がします。

2010年9月に、観光学部2年生と北九州の門司港で5泊6日のゼミ合宿をしました。現地解散の朝、学生の一人が自転車で関門海峡を渡って行きました。10日ほど経って学期が始まりましたが、彼は箱根付近を東へ走り続けているところで、学期最初の授業に間に合わないご連絡がありました。私もやってみたくありません。



上/当時を回想する松村公明教授 下/学生時代最初の遠出となった九州旅行のページ

読書案内

本号の特集テーマに関連する本の中から選んだのは、時代を隔ててかつての「日本」を訪ねたふたりの旅行者の記録。



日本奥地紀行

イザベラ・バード著
高梨健吉訳(二〇〇〇)
平凡社(本体一五〇〇円十税)

典、である。この書物は、イザベラ・バード(Isabella L. Bird)という中年のイギリス人女性が、1878(明治11)年5月から数カ月かけて日本国内を旅した際の記録であり、原題を『Unbeaten Tracks in Japan』という。1880年に初版が発行されたこの『日本奥地紀行』についてはすでに多くの人々が論を残しており(例えば、宮本常一『イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む』平凡社ライ

ブラリー)、特に当時の東北地方における生活習慣や北海道の先住民たるアイヌの様態をうかがい知ることのできる貴重な資料、といった評価が確立されている。

さてバードは、『アジア協会誌』という英文ジャーナルに掲載された日本に関する論考を参照しつつ、かつ手元の地図に載っていない場所を「奥地」と規定しながら、日本列島を北上していった。こうした事実から浮かび上がってくるのが、「情報」という要素である。

情報の存在がバードの旅に対する動機と好奇心を作り出した一方で、情報の欠落が彼女の「奥地」に対する欲求をより加速させる。そして「奥地」への旅を無事に終えたバードは、『日本奥地紀行』という新しい情報を、後に自らの手で生産することとなる。

ところでバードは、行く先々で人々の「視線」に困惑させられたことを、たびたび書き残している。

例えば、町に入ると「外人」が来た、と言われ次第に多くの人々が周囲に集まってくる。宿に泊まれば、障子に穴を空けられ、そこから何人もの人々が部屋のなかを覗き込んでくる。あるいは宿の外に出ようものなら、警官が出動せざるを得ないほどの群衆がバードを待ち受けている。すなわち、日本の「奥地」をまなざそうとしたバードの存在は同時に、「奥地」に住まう人々によってまなざされる対象でもあった。

こうしてバードの旅は貫徹されるわけであるが、さらに言うとな

女性は、道中で得た様々な経験や見聞、そこからわきあがってくる感情や感傷を、妹へ手紙として書き送っている。『日本奥地紀行』はこれらの手紙がまとめられたものであるとされているが、「こゝに」「旅」という出来事(そこには目的地からの生還という条件も含まれる)を前提とする「紀行文」なる「様式」が生成されていくプロセスを、我々は確かに見て取ることができる。

最初に書いたように、『日本奥地紀行』は明治期に日本各地を訪れたイギリス人女性による旅の記録である。バードによる時としてセンチメンタルな記述の積み重ねを、「奥地」や「未開」に対するオリエンタリズムあるいはパターナリズムとして断罪することは容易である。しかしながらこの書物が、「旅」という現象についての思考を深めるためのテキストとしても読まれ得ることを、ここでは強調しておこう。(千住一)



僕が見た「大日本帝国」

西牟田靖著(二〇〇五)
情報センター出版局(本体一六〇〇円十税)

「か」つて日本だった場所に、はいたたいどんなふうになっているのか? 彼の国の人びとはどう扱っているのか? そして、彼らは「日本」についてどんな思いを抱いているのか?—それを知りたいと思つた」これが、本書の著者である西牟田靖が旅に出た理由である。

こうした欲求にもとづき、西牟田はかつて日本の領土であったサハリン、台湾、韓国、北朝鮮、中

あるいは「日本」という存在に対する感情は、揺れ動く。そして彼は、2000年から2004年にかけて行つた自らの旅を、8月15日の靖国神社境内で終わらせる。

このような西牟田による旅の記録に目を通していくと、興味深いことに気が付く。それは、自身自身がどこに在るのか見失つてしまっていることを吐露する場面が多く登場する点である。西牟田がいま身を置いている空間は、「外国」なのか「日本」なのか、あるいは「現在」なのか「過去」なのか。こうした歪みに似た感覚に身を委ねながら、ある場所で起こった出来事がいくつもの「層」を織りなしているという「現実」を、そこに暮らす人々の生き様や、彼らが日本時代の建築物とのあいだに取り結んでいる関係などを手掛かりに、西牟田は記述していく。

また、こうした西牟田による実践は、「観光」という視点からも極めて示唆に富むものである。西牟田自身が自覚的であるように、彼

国東北部、ミクロネシアの地を訪れるが、1970年生まれの著者はむろん、日本がかつて「大日本帝国」であった時代を知らない。

道中で日本語を巧みに操る老人に出会い、各地に現存する日本時代の建造物を見出し、日本による「悪行」の数々を陳列する博物館に立ち寄り、当地を舞台として行われた戦争にまつわる記録と記憶に触れることにより、文字どおり有形無形の「日本の足あと」を直視していくなかで、西牟田の「内面」

が訪問した場所のいくつかはすでに有名な「観光名所」であり、多くの観光客がそこを訪れている。「観光」という場面において、「目に見えるものであれ見えないものであれ」場所をめぐる経験や記憶が「商品化」され、あるいは政治的な装置として機能していく様子が、そこには描かれている。

ところで、この本はかなり売れた(翌年には、西牟田による『写真で読む僕が見た「大日本帝国」』が同じ出版社から発行されている)。この本を手に取り、西牟田の足跡を後追った者も多いと聞くと、多くのフォロワーを生み出したという事実は、「紀行文」なるジャンルが有する特性のひとつを如実に示していると言えよう。『僕が見た「大日本帝国」』を手にした西牟田が「近くて遠く」「遠くて近い」と表現した、かつて「日本」であった場所に佇む読者たちの眼前には、そして彼らの心のなかには、どのような風景がひろがるのであろうか。(千住一)

高野秀行講演会「それでも私は旅に出かける」

二〇一〇年度立教大学連続シンポジウム「未来の声を聴こう」の一環として、
 辺境作家の高野秀行氏をお招きし、講演会を行いました。

二〇一〇年二月七日(火)
 新座キャンパス四号館二階N四二二教室
 高野秀行氏
 司会 稲垣勉(本学観光学部教授)

海外に行ったからこそ得られるものは、
 何といっても「実感」だと思います。いろ
 いろな国がありますが、たとえば、マスコ
 ミで伝えられる「ミャンマーのイメージとい
 えば軍事独裁政権でしょう。ところが現地
 に行くと、確かに「言論の自由」はないの
 ですが、現実にはタクシールの中でも、食事の
 席でも、あちらこちらで一般市民が政府へ
 の批判や悪口を気軽に話しています。

どうして危険な旅をするのか

「どうして危険に思える場所ばかりを旅
 するのか」と、会う人からよく聞かれます。
 あえて言うなら、知らない場所に行き、目

の前の困難をかき分け、どんどん目標に近
 づいていくことに、大変だけれども面白さ
 を感じるからでしょう。何よりも、生きて
 いる実感が得られます。

このような旅を僕が始めたきっかけは、
 大学の探検部に入ったことです。今から25
 年くらい前、僕が学生だった頃は、欧米を
 除けば外国の情報は非常に少なく、日本周
 辺以外のアジア、アフリカ、南米などは霧
 に閉ざされていました。よくわからない
 分、それらの国々へ行くことへの憧れが強く、
 探検部で実現できることを期待したのです。

1年生の春休み、僕は探検部の活動とは
 別に、単独でインドへ行くことに決めました。
 今思えば、自分を変えたいというか、「自分
 探し」的な思いでインドに向かったともい
 えます(笑)。

インドに着いてまず驚いたのは、とにか

部屋でした。そんなお宅に居候すること自
 体が非常識なのに、その家族は何も言わず、
 僕を快く引き受けてくれて、当たり前によ
 うにご飯を食わせてくれたのです。

驚いたことに、お金をなくしてから、イ
 ンドの人はみんなやさしくなりました。そ
 れまでの僕はお金があった。インドの人た
 ちの感覚では、持っている人は持っているな
 い人に施さなければならぬのです。自分
 が施される側になったことで、インドとい
 う国が、それまで見たインドとは全く違っ
 て見えてきました。

観光学部は2010年11月17日チェンマイ大
 学人文学部との間で学部間提携を調印した。
 チェンマイ大は学生数32,000名を擁する総
 合大学であり、教育の中心さらには産学連携
 の中心として、北タイにおいて教育のみなら
 ず経済・文化などの様々な側面で重要な役割
 を果たしている。ことに人文学部に所属する
 観光学科は、タイにおける主要な観光教育機
 関であり、従来観光学部が進めてきたメコ
 ン地域における観光研究、観光教育援助のパー
 トナーとして大きな意味を持っている。すで
 に教育上の協力が始まっており、今後の交換
 留学、共同研究など関係の深化が期待されて
 いる。観光学部は今回の提携で、大学提携の
 チュラロンコーン大学、学部提携のタマサート
 大学に加え、タイ全土におけるパートナー
 関係を完成した。

くらいはかまわない。とにかくそれが「命」
 だから」と言われていました。ところが、
 その命をなくしたけれど、人の世話になっ
 て、面倒を見てくれる人がいて、自分は生
 きていける。今まで自分が考えていたこと
 とは全く違うと感じました。

リスクとモチベーション

海外にはもちろんリスクはあります。た
 だし、自分の中でしっかりと基準を設け、わ
 ざわざ危険を冒すということはしません。

その一番大きな基準というのは、現地の人
 たちがどう思うか、どう行動するかという
 ことです。食べ物や水も、現地の人が口に
 していれば大丈夫だろうと考えます。同様に、
 現地の人がここから先の街は危ない、この
 ルートは危ないと言えば、そこに行くのは
 やめです。しかし、自分が見たいもの、行
 きたい場所、会いたい人への気持ちは強け
 れば、多少リスクが高くても、それに向かっ
 ていく場合もあります。そうしたモチベー
 ションとリスクのバランスを、僕は一応考
 えているつもりなのですが、端から見ると
 間違っていることもあるようです(笑)。



学部国際交流の現場から
 観光学部 チェンマイ大と学部提携



最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題
2010 4/3	菅野 由仁子 社団法人日本ユネスコ協会連盟企画広報部	異文化交流から国際協力へ
4/16	Rome Chiranukrom チェンマイ大学人文学部長 准教授	Politeness in Cross-cultural Communication
4/17	保 継剛 中山大学旅游学院院长、地理科学・計画学院院长 教授	中国における観光地理学研究30年の回顧
6/7	原 忠之 セントラルフロリダ大学 ローゼン・ホスピタリティ経営学部 准教授	アメリカにおける観光教育のあり方
7/7	Russell Uyeno ハワイ大学ホノルル・コミュニティカレッジ コミュニケーション・サービス学部長	Tourism in Hawai'i
11/24	オム ソホ 京畿大学観光大学院 教授	持続可能な観光のための名所マーケティング戦略
12/11	シンポジウム「若者の海外旅行離れ2:若者よ国境を越えよ」	



Profile

高野 秀行氏 たかの・ひでゆき

早稲田大学探検部に在籍中に書いた『幻獣ムベンベを追い』でデビュー。タイ国立チェンマイ大学日本語講師を経て、辺境作家に。主な著書に『巨流アマゾンを遊べ』(集英社文庫)、『ミャンマーの柳生一族』(集英社文庫)、『極楽タイ暮らし』(ベストセラーズ)、『異国トーキョー漂流記』(集英社文庫)、『西南シルクロードは密林に消える』(講談社)などがある。

どんなに情報が発達しても、現地の雰囲気や実感は、そこに行かなければ絶対にわからないと思います。インターネットが発達し、「行かなくても済む」という人が増えているとしたら本当に残念です。その一方で、「誰も行かないところへ僕が行くから価値が上がる」と考えたりもします(笑)。やはり、みんなにはもつと世界のことに関心もってほしいと思います。もし海外でビジネスを行うにしても、現地に1回行ったことがあるとないとは、かなり事情が違ってくるでしょう。実際に足を運び、自分の目や耳でその土地や人を見ることによって、全く違う世界が広がるはずですよ。

在外研究通信 07

Hanoi

重層化する文化景観

大橋健一(観光学部)



2010年9月より在外研究のためベトナムのハノイに滞在することになった。ハノイでは、本学部とも提携関係にあるヴェトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学に籍を置き、ヴェトナムを中心としたインドシナ地域をめぐる人の移動とそれともなう「文化」構築の動態に関する調査研究を行っている。ハノイでの生活を始めてからここ数ヶ月の間にこの街を歩き回りながら興味をもったいくつかの事柄を以下にご報告したい。

は、副首相を委員長とする指導委員会によって組織された一大国家イベントとしての性格をもって行われ、期間中、開幕式その他、軍事パレード、文芸祭、コンサート、フードフェスティバル、ファッションショー、学術会議など数多くのイベントが連日行われた。

タンロン遺跡のユネスコ世界文化遺産指定

10月10日、宿舎のすぐ隣の公園を会場にして行われたこのタンロンハノイ1000年建都記念大祭の開幕式の様子を見ていて強く興味を引かれたのは、式に参列し

タンロンハノイ1000年建都記念大祭

2010年は、2010年に李朝の始祖リー・タイ・トローが当時のホアルー(現在のニンビン省)からダイラー(現在のハノイ)に遷都し、タンロン(昇龍)と改名してから1000年に当たるとして、ヴェトナムでは、10月10日を中心として数々の大規模な祝賀記念行事が行われた。筆者がハノイに到着した九月中旬には、街はすでにこの一大イベントの祝賀ムードに包まれていた。市内各所には建都1000年を祝うポスターや垂れ幕、横断幕が掲げられ、

市内中心部の公園などでは、10月10日へ向けた祝賀記念行事の会場設営や行事のリハーサルが慌ただしく行われ、その熱気と喧噪の中でハノイでの生活をスタートすることになった。ハノイ滞在の拠点としている宿舎が、市内中心部のホアンキエム湖畔の祝賀記念行事の会場となったリー・タイ・トロー像公園に隣接していることもあって、早朝から夜遅くまで何度も繰り返されるリハーサルの騒音や激しい交通規制に日々悩まされ続けたが、お陰でその一部始終を観察することになった。タンロンハノイ1000年建都記念大祭



1.市内の各所では「I ♥ HANOI」グッズが売られた 2.タンロン＝ハノイ建都1000年を祝う看板 3.タンロン＝ハノイ建都1000年を記念して行われた学術会議。筆者も参加の機会を得た 4.タンロン＝ハノイ建都1000年を祝う横断幕の掲げられたハノイ市内 5.祝賀行事に動員された子供達 6.タンロン＝ハノイ建都1000年を祝うポスター

た来賓の中にヴェトナム共産党、ヴェトナム政府、ハノイ市人民委員会の幹部関係者に加えて、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）事務局長の姿があったことである。式典では、ハノイ市の党幹部の開幕挨拶に続いて、ヴェトナムの「伝統」的民族衣装とされるアオザイに身を包んだユネスコ事務局長が登壇し、ハノイ市人民委員会委員長らにタンロン遺跡の世界文化遺産認定書を授与した。

タンロン遺跡とは、ハノイのバーディン地区の国会議事堂建設予定地で二〇〇二年に始めた基礎工事中に出土した七世紀頃から十九世紀までの重層化した歴代王城の巨大な遺跡であり、一〇一〇年に始まる李朝もここにタンロン城を築いたのであった。遺跡の発見後、国会議事堂の建設計画は中止され、本格的な発掘調査が行われるとともに、ヴェトナム政府は、ここを遺跡公園として保存することを決定し、併せてユネスコ世界遺産登録の準備が進められた。そして、二〇一〇年のユネスコ世界遺産委員会年次会合でタンロン遺跡は、世界文化遺産への登録が決定した。ユネスコでの登録が行われたのは八月であったが、タンロン＝ハノイ一〇〇〇年建都記念大祭のタイミングに合わせてその認定書の授

与が行われたというわけだ。

タンロン遺跡の発掘調査は現在も続いており、その一般公開は未だ限定的にしか行われていない。また、遺跡公園としての整備もまだ途上にある。ここは、一九世紀のフランス軍進駐時に駐屯地となった場所であり、フランスは植民地都市ハノイの建設の過程で、旧王城の大部分の取り壊しを行なったため、現在公開されている区画のうち、史跡としてわずかに残されているものは旧王城跡の門や楼閣の一部のみとなっており、「世界遺産」の名の下に何か壮大な遺跡建築物群を期待してここを訪れると訪問者は失望を抱くかもしれない。今後ここをどのようにして遺跡公園化してゆくのかが大いに注目される。

むしろ、このような状態の中でひとまわり立っているのは、公開区画の中央にあるヴェトナム戦争当時の国防部隊司令部と地下シェルターである。「革命遺跡」と名付けられ公開されているこの一画は、ヴェトナムの歴代王城の遺跡というタンロン遺跡の位置づけからすると違和感を覚えざるを得ない。タンロン遺跡の周囲には現在も国防部隊連の施設が建ち並び、自動小銃を持った警備兵の姿を多く見かけるが、歴代王城が築かれ、フラン

ス軍の駐屯地が置かれたこの場所は、ヴェトナム独立後も国防部の軍事関連施設が置かれ、その意味では、タンロン遺跡はヴェトナム現代史の「遺跡」とも重層化していると理解することができるかもしれない。

植民地都市ハノイ

フランスによるタンロン城跡の取り壊しは、一九世紀後半に本格化するフランスによるトンキン支配の過程で一八九四年から一八九七年にかけて行われた。公開区画の中のパネル展示棟に使われているフランス軍の兵舎であったと思われる建物のファサードの建築年を示す数字には、旧王城取り壊し完了の年である「1897」の数字が刻まれており、この地に重層化した歴史の地層の一部を見る思いがした。フランスは、ハノイ北部の広大な面積を占めた旧王城を取り壊し、ハノイを近代都市計画に基づいて拡張、整備することで、植民地都市としてのハノイを建設していった。フランスは当初ホアンキエム湖の東側から南側一帯、そして西側のハノイ大聖堂（カテドラル）を中心とした活動の拠点を設けた。現在もハノイの中心市街地として機能するこの地区は、ハノイの「フレンチ・クウォーター」



1.リー・タイ・トー像 2.旧インドシナ銀行 3.オペラハウス 4.旧フランス極東学院付属博物館 5.タンロン遺跡の正北門 6.タンロン遺跡では現在も発掘調査が続いている

とも呼ばれ、街路樹の繁るフランス風の街並や多くのフランス風建築が残っている。特にパリのオペラハウスにそっくりのオペラハウス（一九二一年完成、現・ハノイ市民劇場）や、建築時のフランス本国の最新建築様式であったモダニズム様式やアールデコ様式が採用された旧インドシナ銀行（一九三〇年完成、現・ヴェトナム国家銀行）などのランドマーク的建築物を見るに、フランスの植民地支配において建築は、政治的ツールとして大きな機能を果たしたであろうことが理解できる。植民地に本国同様、あるいは当時の最先端の様式で建築物を建てるということは、それを可能にする支配力の大きさを誇ることであり、「文明」の移植とそれへの同化というフランス植民地主義の一大テーマを示すものでもある。

植民地化と「伝統」の創出

一方で、フランスによる植民地化は、単純なフランス本国の「文明」の移植という側面のみでは終わらなかった。植民地化のプロセスは、植民地の土着文化を「伝統」として「発見」し、再構成、再構築する、「伝統」を創出する過程でもあった。

ハノイの街の中で、このことを如実に物語る

建築物の一例として、現在のヴェトナム歴史博物館を挙げることができる。一九二四年にハノイの本格的都市計画を立案したことも知られるエルネスト・エブラールによって設計され、一九二五年から一九三二年にかけてフランス極東学院付属博物館として建設されたこの建築物は、しばしばフランスとヴェトナムの建築要素を融合させた「インドシナ様式」の建築物であると説明される。フランス極東学院は、植民地政策の一環として一九八八年に発足した「インドシナ考古学調査団」を前身として一九〇〇年に設けられた東洋学研究機関であり、同学院は付属博物館の設計にあたって、エブラールにアジアの様々な建築様式や建築要素に関する調査研究の機会を与え、それらの集大成としてこの博物館が設計されたという。

この博物館が設計、建設された当時、フランスは、ヴェトナムのみならず、ラオス、カンボジアを含め、これら地域をフランス領インドシナ連邦として支配統合していた。「インドシナ様式」の創出は、このような政治的境界の中での「伝統」の再構成を示すものであり、「インドシナ」の文化的統合を象徴するものとも考えられよう。

土着の文化要素が取捨選択され、「伝統」の名の下に再構成される過程は、何も建築物にのみ見られる現象ではない。本文冒頭で触れたタンロンハノイ一九〇〇年建都記念大祭の開幕式でユネスコ事務局長が身にとっていたアオザイもまたフランス植民地期の一九三〇年代に創出された「伝統」であると指摘されている。

ハノイの文化景観の重層性

ハノイの文化景観は、フランスの植民地期の後のヴェトナム独立、独立後の旧ソヴィエトブロックからの影響、そして経済刷新政策の導入と、その後展開した政治経済的環境の変遷の中でさらに重層化し、今日に至っている。ハノイの街をさらに歩き回ると、これらの動きの中で形成された異なる文化的地層にも出会うことになるだろう。

幾重にも重層化した文化景観の中でハノイの街を歩き、生活することで、この都市が歩んできた歴史と文化の多様性をさらに発掘してゆきたいと考えている。

2011年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの
観光産業の入門的公開講座を実施しています。
学生はもちろん、社会人の方々にも広く受講頂けます。

旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」
「総合旅行業務取扱管理者試験」
のための準備講座

(2011年4月開講7月講義終了)

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容は、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い分野を扱います。

ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ

(2011年9月末開講12月講義終了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業を、今日「ホスピタリティ産業」と呼んでいます。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い分野まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

講座に関する問い合わせは

立教大学観光研究所事務局

(池袋キャンパスミツチエル館)

〒171-8501

東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279

Email: kanken@grp.rikkyo.ne.jp

http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/



次号予告

2011年9月刊行予定

特集

「観光」の可能性

交流文化

11

2011年2月28日発行

発行人 村上和夫
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀、木村由香利
印刷 こだま印刷株式会社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2011 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.
ISBN 978-4-9902598-7-7

筆者紹介 (50音順)

稲垣勉 (いながき・つとむ)

観光学部教授

観光消費論、文化研究専攻。1973年立教大学社会学部観光学科卒業、同大学院社会学研究科修士課程修了。1987年より本学勤務。1994～95年ヴァージニア工科大学客員教授、2000～01年ハワイ大学客員教授、2009～10年タマサート大学客員教授。主著に『観光産業の知識』、『ホテル産業のリエンジニアリング戦略—環境・コミュニティ・表現・スタイル・場所性—』(以上単著)、*Japanese Tourists* (共編) など。

岩田修二 (いわた・しゅうじ)

観光学部教授

1971年明治大学文学部史学地理学科卒業、1976年東京都立大学理学研究科単位取得退学。理学博士。東京都立大学名誉教授。東京都立大学理学部助手、三重大学人文学部助教授・教授、東京都立大学教授、首都大学東京教授を経て、2006年4月から現職。専門は地形学・自然地理学・地誌学。主な著書に『山とつきあう』岩波書店(1997)、共編著に『世界の山やま』古今書院(1998)、『地球史が語る近未来の環境』東京大学出版会(2007)など。

大橋健一 (おおはし・けんいち)

観光学部教授

都市人類学・都市社会学及び観光文化論専攻。1984年立教大学社会学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。主要著作に『都市エスニシティの社会学』、『香港社会の人類学』、『アジア都市文化学の可能性』、『観光のまなざし』の転回、『観光文化学』(以上共著) など。

千住一 (せんじゆ・はじめ)

奈良県立大学 地域創造学部 観光学科 講師

1976年生まれ。立教大学社会学部観光学科卒業、立教大学大学院観光学研究科博士課程前期課程修了、同後期課程満期退学、博士(観光学)。立教大学観光学部助手、助教を経て、2010年9月より現職。

松村公明 (まつむら・こうめい)

観光学部教授

1986年慶應義塾大学文学部史学科卒業、1993年筑波大学大学院博士課程地球科学研究科単位取得満期退学、秋田大学教育文化学部助教授を経て、2006年4月より現職。専門は都市地理学・観光地理学。主な著書・論文に『日本の地誌4 東北』朝倉書店(分担)、『仙台市における宿泊機能の立地特性』地学雑誌、『中国吉林省・延辺朝鮮族自治州における国境観光の地域的特色』立教大学観光学部紀要など。

安島博幸 (やすじま・ひろゆき)

観光学部教授

1973年東京工業大学工学部社会学工学科卒業。ラック計画研究所、東京工業大学社会学工学科助手、金沢工業大学建築学科教授などを経て、1995年より本学勤務。工学博士。主著に『観光レクリエーション計画論』、『アメニティ都市への途』、『日本別荘史ノート』(以上共著) など。